

カタカナ外来語研究

松浦 明

On English Loanwords in Japanese

MATUURA Akira

《Summary》

This paper discusses the present situation of English loanwords in Japanese daily life. First, their whole picture is described. In brief, the role of Chinese characters is declining as a whole and English loanwords are partially replacing them, supplementing their drawbacks. This picture is followed by special references to several aspects which interest the author, with concluding remarks at the end.

はじめに

英語からとりいれられたカタカナであらわされる外来語（以下、外来語と略記）研究をはじめたのはいつのことだろうか。はっきりした記憶がない。のこされているノートから判断してすくなくとも30年前にはさかのぼると思われる。

そのきっかけになったのは吉武好孝著『翻訳事始』であったことはよくおぼえている。私は外来語研究をもとにこれまでいくつかの論考をあらわしてきた。大東文化大学の『語学教育研究論叢』（1992年、1996年、2003

年)に掲載していただいたものもそこにふくまれる。

今回の論考は、これまでの論考が外来語の1つの局面を論じているのとはすこし構成をかえて、まず前半で現代の日本語の全般的な状況をながめ、後半は外来語にみられるいくつかの傾向について論じることにする。いわばこれまでの研究の1つの区切りをつけたいという気持ちからである。

ここでとりあげた資料については、一般の日本人が日常使ったり、見聞きする表現を中心にすえたため、文学作品や学術雑誌、総合雑誌などではなく、2005年の1月から9月までの、人々の日常の会話、町や通りでみかける表現、広告、チラシ、領収書のたぐい、テレビ番組や新聞などを対象とした。外来語の表記は新聞に使われているものを踏襲し、単語と単語の間には原則として中黒をいれた。

なお、「ローマ字」という単語について定義をしておきたい。書物によっていろいろな意味に使われており、あいまいさが気になるところである。私はこの「ローマ字」という単語を日本語を表記するためのアルファベット文字という意味に限定したい。ローマ字運動やローマ字教育になどというときに使われるローマ字はこの意味である。それに対して、日本語以外の言語を表記するときのアルファベット文字を「アルファベット」とよび、「ローマ字」と区別したい。なお、この「ローマ字」と「アルファベット」を総称して「横文字」とよぶことにする。

日本語の中の外来語と横文字

それでは日本語の中の外来語と横文字の使用状況をみていくことにする。ローマ字で書かれた日本語はともかく、アルファベットでつづられた英語の単語を日本語の一部とみなしてよいのかについては賛否両論あろうが、私は日本語が使われている環境において生活の一部になっているアルファベットによる英語も外来語とならべて論ずることにしたい。

外来語が、その用いられている場、地理的条件、年齢などによって大きな差

があることは当然であるが、ある意味で混とんとした状態にあるとってよい外来語の使われかたにもいくつかの傾向がみられ、それがたがいに複雑にからまりあっていると私は考えている。それはこれからくわしくのべていくことにして、ここでは外来語と横文字の大まかな状況をつかんでおきたい。

特殊な状況は別として、私が日常、都会でふつうのくらしをしていてはつきりいえることは漢字の役割が部分的にひらがな、カタカナ、横文字にとってかわられつつあるということである。町の中を歩き、店の看板や商品名、雑誌の名、食事をする店のメニュー、車内広告やチラシ、トラックの側面、段ボール箱などをみてもそれがわかる。マンションの名前には漢字は地名をのぞいてはほとんど使われない。石川県金沢市の繁華街にある店の名一らんにもカタカナや横文字の進出がいちじるしい。

ひらがなは JR や私鉄の特急の名前に使われているし、店員の名札にもひらがながめずらしくない。客が読めないとこまるからとのことである。カタカナ日本語もレジに出る表示やレシートにごくふつうに用いられている。

もともと、公官庁の文書や選挙のための文書では、たとえ外来語やアルファベットが大きく書かれていても、読む人にぜひ理解してほしい部分は漢字かなまじり文で書かれている。

外来語が多く使われる品詞は圧倒的に名詞であり、アドバイス、ウール、ドア、ライン、レーズンなどは忠告や羊毛といった日本語とおきかわっているとってよい。英語の形容詞の増加もいちじるしく、オリジナル、コンパクト、タフ、フリー、リアルなど数多くあげられる。動詞はさすがに「みる」を「シーする」とまではいわないが、「～する」をつけて、エンジョイする、カウントする、サポートする、フォローするなどがごくふつうに使われるようになっている。

過程とプロセス、機会とチャンス、硬貨とコイン、対照とコントラストなどは外来語のほうが書きやすいし耳できいてもわかりやすいのでこのんで使われるのだろう。キャンドル、ブルー、ボトル、メニュー、ワインが使われることの1つの理由に、あるいはそれをあらわす漢字（それぞれ蠟燭、憂鬱、瓶また

は壇、献立、葡萄酒)のむずかしさをあげることができるかもしれない。

私がこの『語学教育研究論叢』の第13号(1996年)で論じたひきずられ現象(合成語の中では日本語の基礎語いも外来語であらわされる現象)は依然として日常的に多くみられるし、おなじくその第20号(2003年)で扱った英語の～ing形起源の外来語もまったくおとろえをみせていない。

以上、ごく大まかに日本語の中にみられる外来語と横文字の状況を見てきたが、これからは私がとくに注目している現象について具体例をあげながら説明をくわえていく。

意味の拡大

私が今もっとも注目している現象は、私が「意味の拡大」とよぶそれである。ある言語がほかの言語から単語をとりいれるとき、通常その意味は1つにかぎられる。それがそのまま固定して長く使われることももちろんある。たとえば、ポルトガル語からとりいれたカステラという単語は菓子の名前であり、それ以外の意味に使われずにきた。ところが、私がこのごろ「おや?」と思うことがしばしばおきている。つまり、それまで使われてきた意味とはちがった意味で——ほとんどの場合、英語の一般的でない意味が英語の主たる意味で——外来語が使われるようになってきているという現象がみられるのである。

まずは2005年7月の大東文化大学の定期試験を監督したときの経験である。試験のはじまる前に事務員が「もう一度アナウンスします」と学生たちにむけて告げたとき私はとまどった。アナウンスとは一体どういう意味なのか、と。私はてっきりマイクで注意事項をつたえる意味なのだろうと思って注目していたら、なんのことはない、単に「口頭でつたえる」意味だった。ほかの大学の試験の注意書きにもこのことばがおなじ意味で使われていた。日本語でアナウンスというときそれはマイクで何かをつたえる意味であり、あきらかに上の例は英語の基本的な意味で使っている。なぜわざわざアナウンスということばを使ったのかはわからないが、特殊な意味からこのような一般的な意味に使

う例がこのごろめだつようになった。

別の例をあげる。リクエストという単語は、以前はラジオ番組でその番組をきく人がききたい音楽を希望するという意味にかぎられていた。きわめてせまい、特殊な意味である。ところがこのごろはこの単語の意味がひろがりを見せている。私の住んでいる川崎市の市立麻生図書館へ行くと「予約・リクエスト申込書」という小さな紙がおいてあった。リクエストの意味をきくと、ほかの区内の図書館から本をとりよせてほしいとか、本を買ってほしいことを意味するとのことである。そのことは用紙には書いてない。たしかにリクエストを使ったほうが表現が短くてすむが、はじめてみる人はとまどうだろう。6月22日にBSフジをみていたらローカル線で駅へとまるよう乗客が乗務員に申し出る意味にその単語を使っていた。一般の人が会話の中で「要求する、要望する」という意味で使っているのを耳にしたこともある。このようにして、これまでごくかぎられた意味にしか使われなかった単語がひろい、一般的な意味をもつようになるのだろう。

私の家の近くの、かかりつけの歯科医から葉書もらった。歯の「メンテナンス」(原文のまま)と書いてあるのにめんくらった。歯にもメンテナンスを使うのかと思ったのである。ここにも意味の拡大がみられる。

もう1つの例がオフィスである。これは従来、事務所の意味にしか使われてこなかった。このごろは大学の教授が学生と面接するための掲示にオフィス・アワーという表現を使うのはふつうである。ある私鉄の駅の歯科医の広告にはデンタル・オフィスという表現があった。「オフィス」が「事務所」だけではなくなりつつある。

そのほか、従来ボトル・キープでのみ使われていたキープが、野球の「首位をキープ」へ拡大し、そして最近「維持する」という一般的な意味で大学生が使っている例を8月16日の朝日新聞朝刊でみた。また、商品の市場占有率という特殊な意味にしか使われてこなかったシェアが「わかちあう」という意味に使われるようになっていく。9月15日の朝日新聞朝刊の見出しの「ルームシェア」(原文のまま)はこの例である。クリーニングも衣服のみならずハウ

ス・クリーニングなどのような一般的な意味に拡大しているし、パフォーマンスも演技の意味から業績の意味に拡大している例を8月18日の日刊ゲンダイでみた。

最後にステーションであるが、これはもっぱら鉄道の駅の意味で使われていたが、このごろはこれも意味を拡大しつつある。宇宙ステーション、報道ステーション（テレビ朝日の番組名）、ホーム・ヘルパー・ステーション、クリーン・ステーション（ゴミについて）などの例がみられ、これからもこの単語は意味をひろげていくだろう。

スポーツの分野で使われていたキャッチ、タッチ、トライも一般的な意味に使われるようになってきている。

和製英語

和製英語はそれ自体興味ぶかいテーマで、いろいろな角度から分析されており、その定義に幅がみられるが、ここでは語形だけに限定することにしたい。

この意味の和製英語は大きく2つにわけられる。1つは日本人が英語の単語をくみあわせて表現をつくりだす場合、もう1つは純粹に、それまでになかった単語をあたらしくつくりだす場合で、前者の例にオフィス・レディー、後者の例にNOCTY（川崎市溝ノ口の愛称）をあげることができる。

2005年の例を1ずつあげてみよう。

前者の例としてクール・ビズが話題性に富む。これは環境省が省エネを目的にした服装の名前として一般公募からえらんだもので、クールにはすずしいという意味のほかにかっこいいという意味もこめているという。英字新聞にも紹介されたし、この英語つづりが書かれた暑中見舞いももらった。これに関連してウォーム・ビズもうまれたと8月23日の朝日新聞朝刊は報道している。ただし、これらはものの名前であるから、その運動がすたれてものがなくなれば、そのことばも自然に消えていく運命にある。後者の例としては名古屋市付近にあたらしくできた空港の愛称セントレアがふさわしいだろう。センターとエ

アポートをくみあわせたというが、この英語つづり centrair はJR車両にも書かれている。南セントレア市という都市の名前は実現しなかった。

朝日新聞からいくつかの例をひろいだしてみることにする。

- ・スピーフィ（つくばエクスプレスのイメージ・キャラクターの名前。スピードを感じてほしいとの思いをこめたという）（2月6日朝刊）
- ・EDWIN（DENIMの5文字をMだけ逆にしてWとし、ならべかえたものという）（3月26日朝刊）
- ・FASTECH（JR東日本の高速試験車）（6月25日朝刊）
- ・リシングル（配偶者と死にわかれたり離婚してふたたびひとりになった人のことを、実際にその状況にある人が名づけたとのこと）（8月24日朝刊）

2拍、3拍、4拍到短縮された単語のほとんどは和製英語なのでここで扱うことにする。

- ・2拍はアマ、コネ、プロ、レジなどすくない。
- ・3拍：アセス、コスメ、コンテ、コンポ、サプリ、サンド、セレブ、チョコ、レトロなど
- ・4拍のうち1語の一部が省略されたもの：イラスト、プレゼン、リストラ、リハビリなど
- ・4拍のうち2語の一部が省略されたもの：アパート、アメ・フト、コンビニ、スパ・コン、セク・ハラ、デパート、トレ・パン、ファミ・レスなど
- ・4拍のうち一部に日本語をふくむもの、中黒は省略：財テク、自主トレ、ダントツ、ドタキャン、デパ地下、パチスロなど

エコ、テク、ナビ、ロボのような短縮された2拍の部分が造語力を持ち、ほかの単語とむすびついてハイ・テク、カー・ナビ、ロボ・コンなどあたらしい単語をつくることがある。たしかに、このような短縮形は便利だが、日本語との同音衝突¹⁾をおこすこともあるので、注意が必要である。

原語への接近

私が「原語への接近」とよんでいる現象は、外来語を英語の標準的とされるただしいかたちに近づけようとする傾向をさす。たとえば、複数形がほとんどみられない日本語の中に複数形をもちこんだり、英語の過去分詞形を使わなくても意味が通じるのにわざわざそれを使うところにそれがみられる。そのようにしないと意味が通じないからではなく、あきらかにそこには英語志向の気持ちがみてとれる。日本語の中でさえできるだけ英語の正確な表現を使いたいということだろう。ホテルのように直接外国人の目にふれるような場所では、外国人にわかりやすいようにという配慮のほかに、まちがった表現はさげたい、はずかしくない表現にしたいという気持ちもはたらいていると考えられる。

まず発音についてであるが、英語の [ei] をエーと発音していたものがエイになりつつある。エッセーがエッセイに、メイクがメイクにというのがその例である。9月13日の朝日新聞夕刊にはシェークスピアとシェイクスピアの2種類の表記のゆれがみられた。グラウンド (groundから) がグラウンドになりつつあるが、グラウンドが定着するとグラウンドはgrandからきたグラウンドだけに限定されることになる。

次に単語についてのべる。

実用英語技能検定試験を実施している日本英語検定協会は平成5年の第1回試験から、一次におこなわれるヒアリング・テストという名称をリスニング・テストに変更した。外来語を扱う本ではこのヒアリング・テストが聴力の試験という意味になってしまうと指摘されており、いやしくも英語の技能を評価する試験の名称としてふさわしくないというのが変更の理由だろう。

競技のゴールということばが、しだいにフィニッシュにとってかわられつつある。オリンピックなど国際競技がテレビでナマ中継される時代であるから、これは当然のなりゆきとみてよい。

パーマを扱う店の掲示に以前はパーマと書いてあったのが、このごろはp

e r mという英語のただしいかたちをみかけるようになった。

また、ホテルなどで受付にR e c e p t i o nという表示がみられるが、これもただしい英語にしようという意志のあらわれと思われる。これが日本人の間に定着してくると、従来のレセプションという、それとはちがった意味をもつ外来語が影響を受けて原語の意味に変化したり2つの意味に拡大する可能性がある。

複数形の増加は最近のめだった傾向である。タバコのS e v e n S t a r sをセブン・スターズとって買う人はまずいない。これは表記と発音の不一致である。ところが、ボーイズという複数形がテレビ・ドラマのタイトルに使われているし、日本人が歌う曲の名前の一部にもなっている。ロボッツという複数形もみかけたことがある。

過去分詞については、シンクロナイズド・スイミング、プリペイド・カード、ボイルド・エッグなどまだ例はすくないものの、これからふえていく可能性がある。コーヒー・ショップの表示には英語はI c e d T e a、日本語はアイス・ティーと不一致がみられるが、日本人が注文するときにはわざわざアイスト・ティーと英語流にいわなくても完全に意味は通じる。これがゆくゆくは発音も表記もアイスト・ティーになっていくかは、微妙なところである。

略 語

アルファベット文字を略語として使う例も多い。1文字、2文字、3文字、それ以上とさまざまである。1文字から順にあげていく。

- ・ 1文字：A（答え）、B（地下）、D（野球場のドームの略、テレビから）、F（階）、M（野球で優勝までのマジック・ナンバー、マグニチュード）、Q（質問）など。Pはページ、駐車場、パック（商品の1包み）、午後（ある若い女性がメモにPMと書いてからPと略した）などいくつかの意味がある。Rも道路（r o u t e）、（ボクシングの）ラウンド、（野球の

スコアボードの) 得点、(小田急電鉄のチラシの) 特急ロマンス・カーの頭文字、(川崎市の3R計画の) リデュース、リユース、リサイクルなど複数の意味をもつ。

- ・ 2文字: CG、CM、DJ、DM、HP、IT、PR、SP (テレビでスペシャルの意)、TV、UV (紫外線)、VS など
- ・ 3文字: ATM、DIY、DVD、NPO、TEL、URL、VTR など

朝日新聞からの例

筋萎縮性側索硬化症 (ALS) (2月16日朝刊)

道路交通情報通信システム (VICS) (2月21日夕刊)

転換価額修正条項付き転換社債型新株予約権付き社債 (MSCB) (3月17日夕刊)

自動体外式除細動器 (AED) (8月30日朝刊)

漢字では複雑になるこのようなアルファベットの略語がこれからもふえていくであろうが、PやRのように1つの文字がいろいろな意味をあらわすのは不便で、contextである程度意味が推測できてもアルファベットの文字が26しかない以上なんらかの対策が必要となってくる。

複雑な関係

外来語の実態はかならずしも単純なものではなく、いろいろな要素ががからまりあって複雑な様相を呈している場合もある。それをときほぐすのはなかなか容易ではないが、ここではそのうちのいくつかの例をあげておきたい。

まず、意味の拡大がどんな結果をもたらすかをみてみよう。外来語がいくつかの意味をもつということは、その使いかたがむずかしくなりそれだけ理解度がおちることを意味する。英語をよく知っている人には問題が生じないが、そうでない人にとっては負担となる。漢語のほうがまだまだ、多少使いにくくてもそちらを使おうということにもなりなねず、外来語を使う傾向にブレーキをかける要素をもっている。

英語の長い表現を短縮して2拍あるいは3拍や4拍の単語にすると、和製英語をうみだす結果となるし、それらが漢語との同音衝突をおこすと、耳で聞いたときにわかりにくくなることをある程度覚悟しなければならないだろう。

なぜ外来語を使うのか

なぜこれほどまでに外来語を使うのか。その理由をこれから考えていくことにするが、実はその理由もそれほど単純ではなく、いくつかの理由が複雑にからまりあっている場合がある。

かつては外来語は本来の日本語とちがって一種の舶来趣味、外国、とくに西欧文化へのあこがれを反映したカッコイイ、しゃれた雰囲気をかもしだすものと論じられた。たしかにこの傾向は、ファッションや化粧品、西洋料理、美術など西欧文化と密接にむすびついた分野ではいまだに根強いものとみえ、商品名や広告などには外来語（フランス語など英語以外の言語から来たものをふくむ）のほかに英語やフランス語そのものもめずらしくない。商品を高級でしゃれたものにみせるためには欠かせないと考えられているようだ。

しかしこれ以外にもさまざまな理由があるとみてよい。まずあげたいのが漢字との関係である。外来語表記に用いられるカタカナは漢字とくらべて書きやすい、読みやすいという大きな利点をあげることができる。漢字が日本文化の中にふかくその根をおろし日本文化の形成に大きな役割をはたしてきたことは否定のしようがない。しかしその漢字にも、たとえば、文字の数が多、画数の多い字がかなりある、音と訓をふくめて読みかたがむずかしい、同音異義語が多いなど欠点がいろいろある。みてすぐわかる、場所をとらず短く表現できるなどの利点はあるものの、不便な点をはるかにそれをしのぐ。明治時代のはじめから漢字をへらそう、なくそう、ほかの文字を使おうという運動が展開されたのも、この漢字のむずかしさをなんとか克服しようとした先人たちの危機感からであったことは指摘するまでもない。

国立国語研究所「外来語」委員会が外来語を漢語でいいかえてみてもさっ

ぱりひろまらないのも、漢字そのもののむずかしさのほかに漢語の連続がとっつきにくさの印象をあたえることや、さらに耳で聞いたときのわかりにくさなど複合的な理由が考えられてよい。たとえば、2003年11月に、オブザーバーを陪席者、ノーマライゼーションを等生化、ボーダーレスを無境界、マルチメディアを複合媒体にいいかえる提案をしているが、一般の人はむしろ外来語をそのまま使うかその短縮形を使うことのほうをこのむのではないか。

もし日本人が全体としてやはり漢字や漢語は使いにくい、不便であると感じてそれをすこしでも是正するために外来語を使おうとするなら、私はむしろそれを歓迎すべき健全な傾向と考える。

外来語を使うより漢字を使って表現するべきだという主張はわからないではないが見方が一面的にすぎる。漢字や漢語に日本人がいかに苦しめられてきたか——そしてこのことは表面にはほとんどあらわれてこない——をまったく考えていない。やっとな漢字、漢語のくびきからときはなされようとしている日本人を、ふたたびのそのくびきへと追いやることはむごいとは私は考える。

マス・コミが国語力ということばを使うとき、漢字をどれくらい知っていてそれをどれくらい使いこなせるかを問題にすることが多いように感じられるが、はたしてそれが国語力すなわち日本語の力なのであろうか。大いに疑問である。漢字の知識がないと新聞や書物や公文書を読むとき不便であることはたしかであるが、だからといって若者たちが日常生活においてわかりにくく使いにくい漢語を使ってコミュニケーションをわかりにくくする必要があるのだろうか。たとえ外来語を使うにせよまちがいなく自分のいいたいことを相手につたえられるのも日本語の力といえるのではないか。日本語ということばをせまく漢字・漢語を中心にすえて考えるべきではない。

これまでに存在しなかった概念をあらわそうとするとき漢語で表現するより外来語を使うほうが多いようだ。たとえばミュージアム、アート、ミュージックなどがこのんで使われるようになっていく。従来の博物館、芸術、音楽という漢語からはみだすあたらしい概念がつけくわった表現を考えるとき漢字をくみあわせてあたらしい漢語をつくるよりは外来語であらわすのは、1つに

は漢語があたえるかたいイメージをさけたいこと、英語にすぐおきかえられること、国際的に通用することなどが考えられよう。英語でもすぐ表現でき、国際的にも通用するという要素は、会社や商品の名前についてもいえることで単にみばえや音のかっこよさだけの問題ではあるまい。

英語教育がこれだけ普及している現在、日本人の国際的にみた語学べたという問題はあるにせよ、使いにくくわかりにくい漢語よりは外来語や英語そのものを使ってコミュニケーションを正確に成立させるという傾向にはなんら非難すべき理由がない。

大新聞や総合雑誌の記事は依然としてたて書きであるが、一般の日本人、とくに若者の間では書きことばは圧倒的に横書きである。公文書ばかり、新聞の中の広告やテレビの画面ばかり、E・メールばかり、パソ・コンばかり、そして携帯電話ばかり。もしたて書きがいまだに社会の主流であったら外来語はこれほどまでに普及しなかったであろう。

外来語をどう考えるか

これまで論じてきた外来語をどのように考えたらよいのかの問題にうつりたい。これを肯定的にとらえる立場と否定的にとらえる立場があり、後者のほうが多い。私はやみくもに使わないという条件付きの賛成派である。

まず、もとの英語とずれたりまちがった使いかたをしているとコミュニケーションに支障をきたすのでただしく使うべきだという主張が反対論の大きな根拠になっている。日本人同士でもそうであるし、外国人にもわからないとなれば問題であるというわけだ。

ここでしっかりおさえておかなければならないことは、外来語はあくまでも日本語を使っている日本人社会の中で使われていることばであるということである。つまり語形や意味や発音がもとの英語とずれていたりまちがっていてもそれが日本人同士で通じればなんら問題ないのである。日本人が自分たちにつごうのよいように適当に変えて使っているある意味で便利な表現ともいえるの

である。それをもとの英語にてらしてそのまちがいを指摘し、ただしく使おうとよびかけてみてもはじまらない。たとえ外国人からみておかしいと感じられても、よくわからないと考えられてもしかたないのである。外国人には、英語の基準で考えるのではなく日本での使いかたを理解してもらうより方法がない。たとえば、デパートメント・ストアがただしい表現だからといって、この長たらしいかたちを使うより、日本語の短縮パターンにあわせてデパートとちぢめてしまい、それが日本人の間でりっぱに通用するならばなんら問題はなく、格別めくじらをたてる必要はない。私が条件つきで外来語を使うことに賛成せざるをえないもう1つの理由は、どんどんあたらしい外来語が日本語の中で使われるようになっていくとき、それらをいちいちただしくしようとしても所詮それはむりだし、わずらわしく、費用もかかる。会社や商品の名前などを英語の基準にてらして直すことは不当ともいえる。そんな権限はだれにもない。

ただ、コミュニケーションの立場からすると、日本人同士や外国人にとってわかりにくかったり通じなくてはこまるという主張はたしかにあたっている。しかし、これも難易度のレベルはいろいろで個人差もある。あたらしくつくられる表現はなにも外来語だけというわけではなく、漢語のそれにもわかりにくいもの、むずかしいものはいくらかもある。にもかかわらずそのことがほとんど一般の人の中で問題にされないのはふしぎともいえる。外来語はもとはといえばほとんどが英語である上、カタカナで表記されるのでめだつが、漢字は日本語の中で主要な役割をはたしてきており、今も重要な地位をしめているので、わからなくても外来語ほどには異和感がないこと、自分の漢字の知識のたりなさを暴露しそうではずかしく、わからないとはいいいにくいなどの理由が考えられる。

日本の外来語を、アジアやアフリカなどでそれぞれの国の文化にあわせて使われている New Englishes とよばれる英語をひきあいに出して論じる人がいるが、ここには根本的な誤解がある。New Englishes とよばれる英語は日本の外来語とはまったくちがう。New Englishes というのはいわば native の人たちからみて、アジアやアフリカなどの英語を母国語としない国でそれらの国

の人たちによって、英語の文章の中で使われる標準からはずれていると判断される英語のことであり、日本語を使う環境の中で使われるカタカナの外来語とおなじ次元で論じるべきではない。

外来語を否定的にとらえる人のほうが多い理由をさらに考えてみることにしよう。

日本人の潔癖さをあげてもよいだろう。日本語をただしく使おうという本が次から次へと出版されているのをみてもわかる。まちがった使いかたをそのままみすごすことができないという性癖である。

もう1つ考えたいのが日本の恥の文化である。人前で恥をかきたくない、自分の無知をさらしたくないという国民性である。日本人が英語を話すとき、つい文法を意識しすぎ、できるだけまちがいをしないよう考えるので流ちょうにしゃべれないという傾向は、まちがいをおそれず積極的に自分の考えをつたえようとするアジアやアフリカの人たちの態度とよく対比される。外来語反対論の中にこの恥の文化があるのではないかと私はみている。

英語教育との関連もある。私が高等学校の専任教員として英語を教えていたときしばしばなやんだことがあった。選択講座の試験に私は自分の考えを英語で書かせる問題をよく出した。とくに日本文化や日本語について書かせる場合にそうであったが、外来語をそのまま英語の文章の中で使っている答えをどう評価するかである。是々非々で柔軟に対処したといえればきこえはいいが、ある程度わりきって、全体の英語の中で何をいいたいのかがわかれば大幅な減点はしなかった。英語教育の現場で外来語をどうとらえるかは教員の間考えのちがいを反映し、大きな差が生じることもあり得る。評価のみならず、学生・生徒にこのことについての自分の考えをどのようにつたえるのかも考えなければならず、むずかしい問題をはらむ。

外国に出かける日本人が多くなれば当然のことながら、そこで外来語を英語の中にまじえて使ったときうまくいいたいことがつたわらない、あるいは、誤解されるという事態がおこる。そんな例が本にも紹介されている。²⁾ 外来語と英語の関係においてもっともやっかいなのは意味のずれであろう。せまい意

味の和製英語はそれにくらべれば問題はさほど大きくない。デパートをそのまま英語の中で使う日本人はさほど多くないであろう。語形はめだちやすいし、発音をそのまま日本語流に英語の中にもちこむ人もすくないと思われる。それらにくらべて意味のずれは外見上は区別がつかず、つい日本語の中で使っている意味を英語の中にもちこむことになりかねないのである。大きなおとしあなといってよい。これをふせぐには英語の教師や学生・生徒がたえずこのことを意識し、辞書や参考書で英語の意味を確認するほかない。まちがって使って失敗した経験が学生・生徒のこのことについての自覚を高める結果をうむことも考えられる。

以上のべてきたように、外来語が日本語の中で、あるいは英語を使う環境においていろいろな問題をはらんでいることは否定できない。しかしこのやっかいな面ももつ外来語を積極的に利用する手もある。それを日本語を乱す“外来種”としてことさら排除するのではなく、日本人の考えかた、日本の社会、日本の文化をうつすかがみとみなして活用するという考えかたである。外来語が国際理解を邪魔する面もたしかにあることは事実ではあるが、英語とずれることが多いことをふまえた上で日本文化を理解する手がかりとして国際理解に役立てようというのである。たとえば、マイ・カーやマイ・ホームはまちがった使いかたの例としてよくやりだまにあがる。たしかにそれをそのまま英語の中で使えば誤解されるおそれはある。日本語の中で使われるこのマイという表現には日本人のクルマや持ち家に対する強い願望がこめられているとみるべきで、こうした表現から日本社会の実態をかいまみることができる。まちがった使いかただからとバツサリ切りすてるべきではないと私は考える。

私は無条件で外来語を日本語の中に使うことをみとめているわけではない。以下にのべるような弊害も考えられるからだ。

まず、広告や商品名など外来語に一定の利益を期待するような場合は別にして、日常の言語生活において日本語でじゅうぶん用がたりる場合にも外来語をむやみに使うことはさげたい。コミュニケーションに支障をきたし、誤解や不利益、あらぬ対立をひきおこしかねないからだ。とくに外来語は英語になじみ

のうすい人には、意味がよくわからない、発音がむずかしいなどの障害をひきおこす。さらに、むやみに外来語を使うことになってしまい感覚がにぶくなると、あいまいさが生じても気がつかなくなるおそれがあり注意しなければならない。日本語をもっと大切に、という主張はこうした意味からもそれなりに理解できる。英語教育の現場や外国へ旅行する人の外国での英会話への支障にも配慮が必要だ。

おわりに

まさにグローバル化時代といわれる時代に私たちは生きている。このむ、このまざるにかかわらず私たちはほかの国の人たちと全地球的視野に立って政治、文化、民族、言語、宗教などのちがいをこえて交流し協力しあっていかなければならない時代に生きている。そのような時代にあって自分の国の人間さえ満足に使いこなせない漢字や漢語にしがみついているはたして日本人はこれからやっていけるのであろうか。たとえもとの英語と多少ずれてもまだ外来語のほうが国際的に通用する場合があるし英語を知っている人ならすぐわかる外来語も多い。

総じていうなら、外来語はたしかにいろいろな問題点をかかえてはいるものの、部分的にせよ日本語を健全な方向にもっていくことに役立っていると私は考えるし、国際化の時代に日本をよりひらかれた国にすることに寄与するだろう。外来語が日本人にやわらかな発想で偏見や先入観にとらわれることなく、コミュニケーションを大切に考える自覚を高める役割をこれからも演じてくれることを私は切に願っているのである。

注

1) 外来語のリス・トラは、日本語のリス、トラと同音衝突をおこす例で、あるお年よりが実際にリス・トラを日本語と誤解したそうだ。短縮形のコン（ス

パ・コン、リモ・コンなど) は、漢語の造語素、今、混などと同音衝突をおこす。

2) マーク・レッドベター 佐藤千賀子訳『その英語、使えません！英語だと思っているのはカタカナ語です』の88ページに、その1例があげられている。

参考文献

- 石綿敏雄 『外来語の総合的研究』 東京堂出版 2001年
- 榎垣 実 『日本外来語の研究』 研究社 1973年
- 高島俊男 『漢字と日本人』 文春新書 2001年
- 田中建彦 『外来語とは何か 新語の由来・外来語の役割』 鳥影社
2002年
- マーク・レッドベター 佐藤千賀子訳 『その英語、使えません！英語だと思
っているのはカタカナ語です』 小学館文庫 2005年
- 松浦 明 「和製英語—語形成の観点から—」(『語学教育研究論叢』第9
号 所収) 1992年
- 「英語からのカタカナ外来語にみられる基礎語彙の「ひきずら
れ」現象」(『語学教育研究論叢』第13号 所収) 1996年
- 「～ing 形起源のカタカナ外来語を考える」(『語学教育研究論
叢』第20号 所収) 2003年
- 矢崎源九郎 『日本の外来語』 岩波新書 1974年
- 吉武好孝 『翻訳事始』 早川書房 1967年